



朝のこない夜はない

にっかんしんぜん たてやくしや

日韓親善の立役者

なしものとみやまさ こ

梨本宮方子さまに学ぶ道

まな みち

副山首 鈴木正修

近くて遠い国と言われる日本と韓国は、さつこん 昨今も何かと摩擦が絶えません。ただ、

こうした日韓関係史にあつて、りやくこく 両国の親善に尽くしてきた様々な人がおられます。


今回紹介するのはまさにその一人で、そこく 二つの祖国を持った王妃・梨本宮方子さま

(李方子さま) です。

方子さまは一九〇一年、梨本宮家の長女としてお生まれになりました。母の伊都

子さまは鍋島侯爵家の御出身です。一時は裕仁親王(のちの昭和天皇)の有力なお

妃候補の一人として名前が取り沙汰されますが、学習院女子中等科在学中に来日さ



れていた韓国皇太子李垠殿下と婚約されました。いわゆる日韓併合後の「政略結婚」でした。


方子さまが御自身の婚約を知られたのは、避暑に訪れていた大磯の別邸で何気なく見られた朝刊の記事だったと言います。その後、正式に婚約を告げられた方子さまは御両親に「大変なお役だと思いますが、御両親の意にさうよう努力させて頂きます」ときっぱりと言われたそうです。

夏休みが終わり、初登校の日、方子さまは髪を韓国式に結い昂然と登校されました。その姿に学友たちは覚悟を感じ、圧倒され、感心したと言います。

夫となる李垠殿下は明治天皇に大変かわいがられた方で、この時日本の陸軍士官学校に在学中でした。

政略結婚ではありましたが、方子さまは自分に課せられた日本と韓国の架け橋としての責務を強く自覚し、祖国を離れて日本で暮らす夫やその兄弟を献身的に支えられました。

終戦後、夫妻の生活は一変します。日本国憲法の施行に伴う王公族廃止により、垠殿下と方子さまは王公族の身分と日本国籍を喪失して、一在日韓国人となったのです。



お二人の生活はたちまち困窮し、邸宅や資産を売却しながら、細々と生活をされました。

垠殿下は祖国への帰国を望まれましたが、大韓民国の初代大統領・李承晩によって拒否されました。一九六二年に朴正熙が大統領となり、一転、夫妻は手厚く迎えられるました。

方子さまは意を決して韓国に帰化し、当時の韓国ではまだ進んでいなかった障害児教育（主に知的障害児・肢体不自由児）に後半生を捧げる覚悟をされます。

まず新聞に、心身に障害のある訓練生を募る広告を出されました。応募してきたのは八歳になる女兒たった一人でしたが、延世大学の一隅を間借りして教育を開始されたのです。

資金繰りも大変で、七宝焼や書また絵の制作などに自ら励み、商品としてこれを販売したり、王朝衣裳の発表会なども行なわれました。

方子さまの身を粉にしての努力が実り、知的障害児施設「明暉園」と知的障害養護学校である「慈恵学校」が設立され、現在、多くの子どもたちが将来に向けて様々なことを学んでいます。なお明暉は垠殿下の、慈恵は方子さまの雅号であります。最初は反日感情により、様々な非難を浴びた方子さまでしたが、その真心が通じ



朝のこない夜はない (214)

たのでしよう。やがて韓国国内で好意的に受け止められるようになり、功績が認められ、一九八一年には韓国政府から「牡丹勳章」が授与されました。

一九八九年四月三十日、方子さまは永眠されました。八十七歳でした。その葬儀は旧令に従い韓国皇太子妃の準国葬として執り行なわれ、日本からは三笠宮御夫妻が参列されました。その日のソウルの沿道には多くの市民が詰めかけ、涙ながらに葬列を見送ったと言います。

後に韓国国民勳賞権賞（勳一等）が追贈されました。

最後に朴正熙大統領夫人の陸英修女史のお言葉です。

「李方子妃殿下は、六十年代に誰もしなかつた障害者事業をはじめられました。日本の皇族の御出身で、奉仕活動を真心から率先なさつたことは、韓国国民の日本人女性に対するイメージを向上させ、厳しい日韓関係を和らげる役割を果たされました」